時枝誠記博士著述目録並びに研究歴

鈴木一彦

大13・12　(1)「日本に於ける言語意識の発達及び言語研究の目的とその方法」(東京帝国大学文学部卒業論文)→(11)

昭2・1　(2)鈴木朖の国語学史上に於ける位置(「国語と国文学」四の一)→(11)

4　(3)口語文の本質(「国語と国文学」四の四)

4　(4)文法教授に対する卑見(「国文教育」五の四)

5　(5)明治元年より大正十五年に至る国語学関係刊行書目(「国語と国文学」四の五)

昭3・2　(6)本居宣長及び富士谷成章のてにをは研究に就いて(「国語と国文学」五の二)→(11)

昭4・3　(7)伊藤慎吾君著近世国語学史を評す(「国語と国文学」六の三)→(11)、書評であるが、学史編述の根本的態度を示したもの

昭5　○欧米留学より帰朝後、「漢字漢語の輸入に基づく国語学上の諸問題」という講義題目の下に、二年間講義が行われた。これは、直接活字化されなかったが、後の(45)(73)(87)および(111)の一部「言語史を形成するもの」の基礎作業であった。

○この年一月より昭8・3まで、カードをとりつつ「源氏物語」を通読。

昭6・9　(8)古典注釈に現れた語学的方法―特に万葉仙覚抄に於ける―(京城帝大法文学会論纂「日本文化叢考」)→(11)

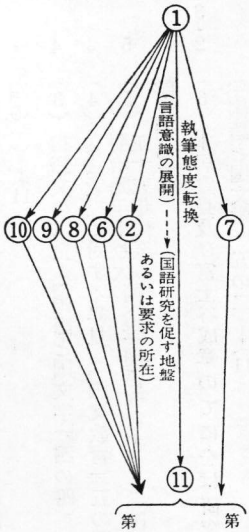
昭7・4　○この年より昭18年まで「中古語研究」の題目の下に「源氏物語」をテキストとした国語学演習が京城大学で行われる。

5　(9)万葉用字法の体系的組織に就いて(「国語と国文学」九の五)→(11)

6　(10)契沖の文献学の発展と仮名遣説の成長及びその交渉

について（「佐佐木信綱博士還暦記念論文集『日本文学論纂』」）

8 （11）『国語学史』（岩波講座「日本文学」）この著と以上の諸論文との関係を図示するとつぎのようになる。



昭8・3 （12）源氏物語帚木巻冒頭の解釈―「さるは」の語義用法に基いて―（「国語・国文」三の三）

9 （13）古語解釈の方法―「さるは」を中心として―（「国語・国文」三の九）

12 （14）国語学の体系についての卑見（「コトバ」三の一二）

（11月8日草）……言語を「もの」として考える考え方に疑問を提出し、「こと」として見る言語本質観を打ち出す。

昭11・3 （15）語の意味の体系的組織は可能であるか（京城帝大文学会論纂「日本文学研究」）

10 （16）国語の品詞分類についての疑点（「国語と国文学」一三の一〇）

10 （17）形容詞形容動詞の連用形に於ける述語格と副詞格との識別について（「国語と国文学」一三の一〇）

昭12・1 （18）海道記新註続貂（「国語教育」二二の一・二）

3 2 （19）文の解釈上より見た助詞助動詞（「文学」五の三）……この論文に言語過程説及び時枝文法理論の成立についての次のような基礎的意見を見ることができる。

一 言語が人間の精神活動であること。

二 解釈に基づく言語の考察ということが、言語研究において実践的な重要な立場であること。

三 文意の理解と文法体系との間に必然的なつながりがあるべきであろうこと。

7 6 （20）心的過程としての言語本質観（「文学」五の六・七）……この論文は、（14）において、随想的に示され、（19）において断片的に示された言語観が、組織化され、体系化されて真正面に掲げられている。そして、この論文の全文は、部分的修正を加えられてはいるが、殆どそのまま『国語学原論』に収録されている。

昭13・1 8 （21）語の形式的接続と意味的接続（「国語と国文学」一四の八）

11 （22）文の概念について（「国語と国文学」一四の一一・一二）

12 11 （23）言語過程に於ける美的形式について（「文学」五の一一・同六の一）

5 （24）言語に於ける場面の制約について（「国語と国文学」一五の五）

6 （25）場面と敬辞法との機能的関係について（「国語と国文学」一五の六）

7 （26）国語に対する山本有三氏の意見について（「文学」

六の七）

9 (27) 菊沢季生氏に答へて（「国語と国文学」一五の九）

10 (28) 国語のリズム研究上の諸問題（「国語・国文」八の一〇）

昭14・2 (29) 敬語法及び敬辞法の研究（京城帝大文学会論纂「語文論叢」）

3 (30) 言語に於ける単位と単語について（「文学」七の三）

11 (31) 昭和十三年度に於ける国語学一般の概観（靖文社「国語国文学年鑑」第一輯）

昭15・2 (32) 国語学と国語の価値及び技術論（「国語と国文学」一七の二）

2 (33) 懸詞の語学的考察とその表現美（三省堂「安藤教授還暦祝賀記念論文集」）

7 (34) 言語に対する二の立場―主体的立場と観察者的立場―（「コトバ」二の七）

7 (35) 国語学と国語教育（朝鮮教育会「文教の朝鮮」一七九）

12 (36) 『国語学史』（岩波書店）……(11) の執筆態度と異なり、(1) の執筆態度に復帰。

昭16・1 (37) 言語の存在条件―主体・場面・素材―（「文学」九の一）

10 (38) 国語の特質（朝日新聞社「国語文化講座」巻二）

12 (39) 『国語学原論』（岩波書店）……卒業論文で〈言語トハ何ゾヤ？〉と疑い、〈言語ハ絵画、音楽、舞踊ト等シク、人間ノ表現活動ノ一ツデアル〉と考えてから、一八年の歳月を経て、ここに一つの言語理論の成立を見た。

昭17・8 (40) 朝鮮における国語政策（「日本語」二の八）

昭18・5 (41) 言語の意味（巻頭言）（「国語文化」三の五）

9 (42) 本居宣長と鈴木朖―初山踏と離屋学訓について―（「解釈と鑑賞」八の九）

10 (43) 国学における国語研究と現代国語学の筋書（「国語と国文学」一〇の一〇）

昭19・2 (44) 最近における国語問題の動向と国語学（「日本語」四の二）

10 (45) 言語学と言語史学との関係（橋本博士還暦記念『国語学論集』（岩波書店））

11 (46) 国語に対する伝統論と革新論（巻頭言）（「国語と国文学」二一の一一）

昭20・5 (47) 橋本博士と国語学（「国語と国文学」二二の五）

昭21・1 (48) 学問における「人」と「対象」と「研究法」（巻頭言）（「国語と国文学」二三の一）

2 (49) 学界総懺悔（巻頭言）（「解釈と鑑賞」一一のニ）

6 (50) 切替へか手入れか―拙著『国語学史』のことども―（「信濃教育」七一四）

9 (51) 「なさけ」について―平安朝生活の一の理想―（「遠天」一の六）

12 (52) 橋本進吉博士著作集「国語学概論」解説（岩波書店）

12 (53) 仮名交り文に就いて（「信濃教育」七二〇）

12 (54) 国語の交通整理（「会館文化」四の一二）

昭22・1 (55)国語問題に対する国語学の立場（「国語と国文学」二四の一・二）
2 (56)国語審議会答申の「現代かなづかい」について（「国語と国文学」二四の二）
4 (57)国語規範論の構想（「文学」一五の四）
8 (58)文学における言語の諸問題（「国語と国文学」二四の八）
9 (59)中等文法の解説と批判（中教出版社「新しい教室」）
9 (60)『国語研究法』（三省堂「国語叢書」）
10 (61)国語に於いて敬語を用ゐる意義（「季刊大学」三・四）
12 (62)西尾実氏の「ことばの実態」について（「国語と国文学」二四の一二）
昭23・3 (63)国語仮名づかひ改訂私案（「国語と国文学」二五の三）
3 (64)国語科学習指導要領私案（講読篇）（「新しい教室」三の三）
4 (65)国語教育における古典教材の意義について（「国語と国文学」二五の四）
5 (66)子供の名前（「日読ニュース」一三）
9 (67)車中漫想—国文学のありかたについて—（「碧落」三の九）
12 (68)活用表はどうして出来たか（山海堂「学窓」創刊号）
12 (69)国語科学習指導要領私案（文法篇）（「新しい教室」三の一二）
昭24・2 (70)『国語科学習指導要領私案—文法篇』（中教出版社）
5 (71)国語教育に於ける誤られた総合主義と科学主義（健文社「国語国文学教育の方向」）
6 (72)国語に於ける変の現象について（「国語学」第二輯）
10 (73)国語史研究の一構想（「国語と国文学」二六の一〇・一一）
11 (74)『国語問題と国語教育』（中教出版社）
11 (75)源氏物語の文章と和歌（紫野故郷舎「源氏物語講座」下巻）
12 (76)平井昌夫氏の「コトバの社会性」を読んで（「ことばの教育」一二の五）
昭25・5 (77)藤原与一著『日本語方言文法の研究』（書評）（岩波書店「図書」八号）
6 (78)『日本文法　口語篇』（岩波全書）
9 (79)スターリン「言語学におけるマルクス主義」に関して（「中央公論」秋季特別号）
10 (80)『古典解釈のための日本文法』（至文堂「日本文学教養講座」一四）
12 (81)漢字政策上の諸問題（「国語と国文学」二八の一）
昭26・1 (82)文学研究における言語学派の立場とその方法（「国語と国文学」二八の四）
4 (83)国語に於ける誤解と曲解（「信濃教育」七七三）
5 (84)国語教育のありかた（中教出版社）
6 (85)国語教育上の諸問題（「国語と国文学」二八の七）
7 (86)かきことば（刀江書院「国語教育講座」巻一）
9

9 (87)国語生活の歴史（同右）
9 (88)言語の社会性について（「文学」一九の九）
11 (89)文章論の一課題（愛媛国語研究会「国語研究」八）
12 (90)対人関係を構成する助詞助動詞（「国語・国文」二〇の九）

昭27・2
5 (91)国語教育と文学教育（教育書林「国語科文学教育の方法」）
5 (92)国語科より見た漢文復活の問題（「新しい教室」七の五）
5 (93)国語学と国語教育との交渉（「国語教育学会紀要」第一集）
8 (94)S・I・ハヤカワ氏著『思考と行動における言語』（書評）（「国語と国文学」二九の八）
9 (95)言語教育と文学教育（金子書房「教育建設」8《西尾実氏との対談》）
11 (96)国語政策の盲点（「東京大学学生新聞」一三九号）

昭28・1
(97)文法研究の一課題（「国語学」第一一輯）
1 (98)新仮名遣は改善の余地なきか（「明日香路」）
5 (99)国語教育の問題点（教育書林「国語科学習指導の方法」）
5 (100)言語における主体的なもの（金田一博士古稀記念「言語民俗論叢」（三省堂））
5 (101)金田一春彦氏の不変化助動詞の本質を読んで（「国語・国文」二二の五）
5 (102)『古典の解釈文法』（至文堂《増淵恒吉と共著》）
8 (103)言語と生活との交渉　特にシャール・バイイの言語学説との対比において（「国語と国文学」三〇の八）
10 (104)「申したまふ」についての考（「国語と国文学」三〇の一〇）
12 (105)文章研究の要請と課題（「国語学」第一五輯）

昭29・1
(106)作文教育の方法について（「実践国語」）
4 (107)『日本文法　文語篇』（岩波全書）
4 (108)『国語教育の方法』（習文社「これからの国語教育のために」叢書第一）
8 (109)漢字制限の問題点（討論）（「国語学」第一七輯）

昭30・6
12 (110)詞と辞の連続非連続の問題（「国語学」第一九輯）
(111)『国語学原論　続篇』（岩波書店）
6 (112)文学教育と言語教育（「信濃教育」八二二）
7 (113)時代の流れ（全日本国語教育協議会誌「国語教育」）
9 (114)私の弁論修業（同）
10 (115)話しことばの性格（明治図書講座「国語教育」第三巻）
12 (116)石垣謙二著『助詞の歴史的研究』（書評）（岩波書店「図書」七五号）

昭31・1
(117)黎明期の国語学と国語政策論との交渉（「国語と国文学」三三の一）
3 (118)『日本文法　文語篇（改訂版）』（岩波全書）
4 (119)古典教育の意義とその問題点（「国語と国文学」三三の四）
5 (120)国語審議会に何を期待すべきか（「日本話術ロータ

リー」）

6 (121)ことばの機能と人間形成（明治図書　講座「国語教育」第一巻）

7 (122)国語教育における能力主義（同　第八巻）

9 (123)竹岡正夫氏の詞辞論批判について（「ことばの教育」八三号）

10 (124)源氏物語の国語学的研究（「国語と国文学」三三の一〇）

12 (125)『現代の国語学』（有精堂）

昭32・3 (126)言語における伝言者の立場について（「国語学」第二七輯）

4 (127)言語の図式的表現について（全国大学国語国文学会「文学・語学」）

9 (128)服部四郎教授の「言語過程説について」を読む（「国語・国文」二六の四）

9 (129)『国語学への道』（『国語研究法』を補訂改題）（三省堂）

9 (130)長船省吾氏の詞と辞の区別に関する論文を読む（「国語学」第三〇輯）

11 (131)詩歌における音楽性について（「国語学」第三一輯）

11 (132)文法論と文法教育（明治書院「日本文法講座」2）

昭33・2 (133)条件法として解釈される連体形の一用法（「国語と国文学」三五の二）

7 (134)平家物語はいかに読むべきかに対する一試論（「国語と国文学」三五の七）

11 (135)平家物語の異本の成立過程の一考察（国学院大学国語研究会「国語研究」第八号）

昭34・6 (136)国語政策のための基礎的研究について（「国語学」第三七輯）

6 (137)『古典解釈のための日本文法（増訂版）』（至文堂）

8 (138)文章表現と題材との関係（明治図書「国語教育」一の六）

10 (139)近世語研究の意義について（「国語と国文学」三六の一〇）

昭35・3 (140)国語学と国語教育（好学社「中等教育講座」国語科篇）

7 (141)文章研究の意義と方法（学燈社「国文学」臨時増刊）

9 (142)『文章研究序説』（山田書院）

10 (143)国語史研究と私の立場（「国語と国文学」三七の一〇）

11 (144)国語教育の基礎的な諸問題（牧書店「実践講座国語教育」）

12 (145)高等学校学習指導要領の改訂について（学燈社「国文学」）

昭36・10 (146)『国語問題と国語教育（増訂版）』（中教出版社）

11 (147)国語問題論議の一の重要な性格（国語問題協議会会報「国語国字」）

11 (148)現代国語の特色（講談社「現代の話し方と文章」第一巻）

12 (149)和歌史研究の一観点（「国語学」第四七輯）

昭37・4
(150)『国語問題のために』(東大出版会「東大新書」)
5 (151)「現代国語」の意義(学燈社「高等学校国語教育実践講座」巻二)
6 (152)漢文教育に何を望むか(アンケート)(「言語生活」一三〇号)
7 (153)人間形成のための作文教育(「中等教育資料」一三四号)
7 (154)国語科の本質と人間形成(明治図書「道徳の時間」一五号)
7 (155)改訂学習指導要領(国語)を教科書に具体化するについての諸問題(学燈社「国文学」七の八)
10 (156)小著『文章研究序説』に対する古田拡氏の批判「言語の時間性」についてを読む(日本文学協会「日本文学」)
10 (157)国語教育は何を教育する教科か(東京書籍「東海の国語」一)
12 (158)国語教育研究はどうあるべきか(明治図書「国語教育」四八)
昭38・1 (159)真理は簡明平易である(東京書籍「教科書のあゆみ」)
1 (160)「現代国語」の意義(学燈社「国文学」臨時増刊)
(161)言語生活の研究と「現代国語」(東京書籍「教室の窓」一二の一)
4 (162)言語過程説に基づく作文教育観(東京書籍「教室の窓」一二の四)
6 (163)読者の立場と鑑賞者の立場(「国語と国文学」四〇の六)
6 (164)『改稿 国語教育の方法』(有精堂、昭和二九年版の改稿)
12 (165)現代語と現代の言語生活(明治書院「講座現代語」1)
(166)国語教育に求めるもの(東京書籍「国語かながわ」)
昭39・1 (167)一読主義は正しい読解指導の目標(明治図書「国語教育」六三)
(168)「新しい国語」の編集にあたつて(東京書籍「教室の窓」)
5 (169)物語文と説明文(東京書籍「東海の国語」一〇)
6 (170)私の国語教科書観(東京書籍「東海の国語」一一)
6 (171)国語教育の諸問題(座談会)(東京書籍「教室の窓」一三の五)
10 (172)栄花物語を読む(「国語と国文学」四一の一〇)
12 (173)近代科学としての国語学(毎日新聞学芸欄)
昭40・2 (174)国語教育における文法教育(明治書院「口語文法講座」1)
2 (175)〈読むこと〉の研究—この研究課題の意味するもの—(「国語・国文」三四の二)
3 (176)言語過程説の成立とその展開(「国語学」第六〇輯)
4 (177)国語教育における〈練習〉について(東京書籍「国語とうきょう」三の一)
4 (178)国語教育の指導原理の必要性(明治図書「国語教育」七七)
5 (179)国語学は改築されねばならない(「駒沢大学新聞」

5 (180) 文章と読解指導（東京書籍「読解指導」）

11 (181) 言語において「意味」とは何か（「教育日本新聞」）

昭41・1 (182) 私の学説と方言（「言語生活」）

(183) 文章表現の特質―古田拡氏の反論に答えて―（明治図書「国語教育」八九）

(184) 現代の言語生活と国語教育（「東海の国語教室」No. 1

(185) 言語・文章の描写機能と思考の表現（早大国文学会編「国文学研究」第三四集）

5 4 (186) 文章の性格と読解の方法（「とうほくの国語教室」二五）

6 (187) 思考の表現としての言語・文章（「教育研究」二一の七）

8 (188) 詞辞論の立場から見た吉本理論（日本文学協会「日本文学」一五の八）

(189) 平安時代の生活の一環としての和歌生活―源氏物語を資料として―（角川書店「国語科通信」）

11 (190) 国語授業と道徳授業との本質的な違ひとはなにか―国語教育研究者の立場から―（明治図書「国語教育」九七）

昭42・5 (191) 鈴木朖と「雨夜の品定」論（「朝日新聞」）……予定原稿

6 (192) 鈴木朖の学説について―活語断続譜・言語四種論を中心に―（鈴木朖顕彰会講演）→(198)

昭42・7・1 (193) 文章研究の基礎理論（早大国語学会連続講座講演）→(199)

この講座は、昭41年・4月より10月に至るまでに五回、入院のため中絶、昭42年5月再開後三回、計八回行なわれたもので予定の約半分を残してこれが最後となった。

10 (194) 監修者のことば（明治書院「講座　日本語の文法」第3巻……以下の各巻にあり）

(195) 文法体系と言語観（同）

以下遺稿による。

11 (196) 言語において文法とは何か（同　第2巻）

12 (197) 文法教育上の諸問題（同　第4巻）

以下講演の録音テープによる。

昭43・1 (198)「時枝文法」の成立とその源流（同　第1巻……(192)の文字化）

3（予定）(199) 言語過程説の基礎にある問題（同　別巻……(193)に至る八回の講演の文字化）

以上

――山梨大学助教授――